



七
七湯根

7
1124
4





箱根七湯藥卷の七

木賀の部

目錄

一湯宿並効驗

一木賀善司々事

一木賀全圖

一八景古碑木

一八重山公時山の図並足柄神社の説

一同古歌



箱根七湯藥卷の七

湯病三軒

柏屋常右工門

龜屋太郎左門

仙石屋直次

効驗

一上湯平温効驗

湯主

龜屋太郎左門

氣血不順

氣虛

久咳

脚氣

頭痛

胸さゝい

もちけ

血塊

一大淹温日

湯主

柏屋常右工門

鬱症

上氣

頭痛

疝氣

ふく

めまひ

秘結症

胸塞

一菖蒲温日

湯主

全

滞下

崩漏

痔疾

腰痛

一切の内症氣血を補ひ皮膚故うり多し百病を輕ん

湯主
仙石屋直次

手脚不仁

志

中寒 中風 霍亂

冷症

腹痛

性善源頼朝公のこころなり本質若司といへるなり
文武の佳名世々傳へて不常と云ふことあり又主
となすことありあるより數ひも有り過あるもの俄に
風の心化りて漸く四神のこころ死と云ふ是より
人々を裁断の医療成るものとあることありと海は
死に近うする時に一人の老僧來りて是より病の
方より温泉の地あり是より治せし病患愈え我々
あつたのみ多きべしと云ふ若司吉成感涙むぢび
當を合せ彼の傍の詠みつくさくゆくとあり愛の

石苔司陰陽の終始と一州の陰をりめし
柏屋と云ふ
家より下苑もさか湯用院某師壹の存りの方より
苔司が屋敷迄とて少々さか地有り爰より苔司が地
と云ふなり

又湯用院の上は山より高所開臺の二靈位とて中央
より阿彌陀仏と彫て右より
信功位青休妙松大師
當開臺骨相降仙尊
ありて余より文字ありれども可く磨滅してよめざる

信功德青休妙松大歸
苗用委骨桐降仙登之

又晉子其角この所へ来りし時

各所を海とえび〜てかつや可南
其角
は地が〜く四角〜く口望語城さふなり町すさ
菜楊〜り〜る〜る花泉腰り落ち大石りむせひ
て浴室の後い接ろそと須川〜し津と波はと
〜子川に東の山際と流き〜このなりてむ〜付
〜食民是園名の流氷之岩、その言枕田〜言さえ
ろ〜いと寂寥〜る閑花あづ〜痛と音々たより
〜とてまの心より療害つ〜ひ来り雪染の〜
〜ひ〜り〜る〜ひ玉環〜いおられゆ〜千金のつ〜
〜う〜縹の月の雪〜高根の花とむ〜ひ或々
信法師のこころ含ひ女の二布〜で湯あり〜る〜と
なが〜とてはし彦の班岐〜つけ〜海と針むよぶかな

上湯也之ふは上（御湯）をてれ（より）の名
ふれ（も）て（は）波（なみ）首（くび）の湯（ゆ）は（大）滝（たき）高（たか）蒲（か）湯（ゆ）なり
る

亦陽月院也之なり薬師堂あり之なり大石なり
高所の八景あり要あり白土小芳泉と之ふ人れ
和号このころ皆一石なり即ちなり

陽明院月

晉司池萍

夏海巡

石面なりの方

ひあつたてまつりての縁を

子儕

梅夜ふりてふも暖乃枕り寄く山風の音



芦ノ湯底倉
ヨリ木賀へ
下り道

底倉山

白鷺ノ滝

仙ツクマ

大タキ

岩湯

仙岩ノ直次

須川早川一ツ
は合して底倉
の方へ流ル



史よりわくもあつたの方へまへつゝ名もて奇
る阿孝石西より白河より

題蛇骨川螢

大英州流菴

班凱曰

岩洞へ浪乃玉ちり

世介湯用院

わあがが

茅師臺よりえりてせむるの山乃中かくる白く
流る滝の架滝中さしてむろくひ新なる花
泉なり云人々往て白鷺れ舞くこゝ底倉倉の
方より南より

又當所山中小水塚とてふあり謂所ありとて
伝より足るはさ往て溪へ川魚くもわされ
るをみる

またけふ城跡の河原より寄石あり也まふくして

炭乃わくむく石目細くありて石大くありてその大
いなるを度より用ひ小成を度石のこゝ角ト
ありておを待けりけりて是を又改く南
より火の物より世上の大木なりとて高し俗名と
して大木石河原とていふこゝ石目所移院の
よりといふる

歌枕

足柄乃所坂よりつらん玉くけ

柿本人丸

官根の山にありあり

さうふいふとある足柄乃

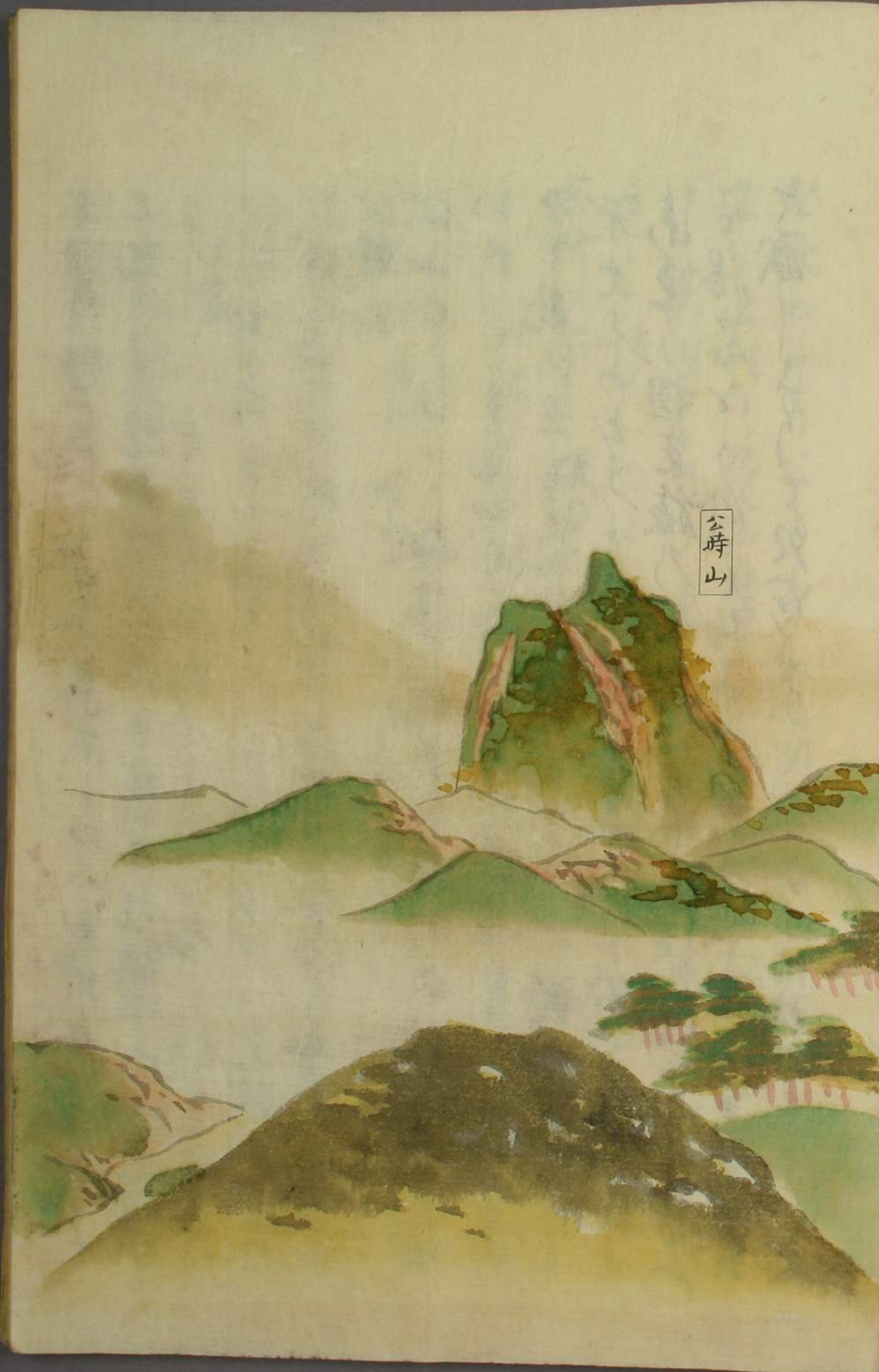
園のこゝ大木とてあり

清守因豊

續古今

あやうめ園のたきうめうめなれり
月とていふなり

家隆



公時山



明神嶽

宮城野

亦因新仙石原より木の葉石くしりおれ也稀也山て
石面く木の葉の形いろくえい法園をもこの形ひ
多しといふ大なる石わくくして凡く似たり尚所
よりあり石を鑑くして世にきく文藝に因ひ
て可くあるたうく品画十の毫りおせに番友に記し
公時山

け山をむり―揚津子頼光公奥州の任もて上洛
の折くは揚津子ありあり遠のきなり―
そく親のまをえたとしひ綱を命して彼所をさし―
米久志めありを姫中童形とて坊よりけり―
あまより頼光族乃破子百奇くは後の伯となりあり
く張麻をのりく柏あり―次玉斯ふあり運くかま
て殿―くくくは河さひとめくは諸をくくく買
て殿

と承めくくく事くくく時とえられいその
名と云時く名家あり―とあり以上大平記―毒
―其時さる凡のま―ありて右云時のあつるふ
まて後人いつくくひ習い―くくは

亦竹の下り坂田大明神とて公時をききなり―
くく山社あり園花万葉記ありあり世に
くく

八重山 系初 時子 山あき ことし
山城所より西の連山まへく八重山くく古歌多
く

万葉

上総國朝集使大掾大原真人今城向京之時
餓之歌
郡司妻等

安之我良乃夜敬也麻故要氏伊麻之奈婆多
禮乎可伎義等弥都々志努波年

足柄山景物

櫻 時多 鹿 紅葉 杉 舟木 玉小菰
つゝふけた 川坂 仍りふ 山の味 国

霍 あけのこぬき 富士の根 湯治所
仍りふ 富士の根 湯治所

本質よりハ成来りあられう山とてこの思ふごとく
古の海道より國のあつてなるより清和納公枕
弟よりと云ふ足柄より更なりわく西の方仙石
系より一國なり古く人の國と云ふ移り
ものより又因りて名の改まりてふつれも古
國の心はあつて通るなりぬる

足柄明神 神主仲津氏

祭神匠なり但し神鏡と祭より古傳より曰ひ
男より愛妻疾く死をんとも付一鏡と云ふ
授けし人若き慕の心あつて此の鏡をえし
やいひて死より更悲傷止時なり教のより鏡を
いふこと妻の安行果せし故とせのゆくより
いふこと其の鏡と云ふて神とて故よりいふ
よりやいふ事なりと所とお祈りやとせ

神社考

足柄明神昔赴唐其妻神獨留守三歳明神
帰朝妻神色白肥美明神日思慕之情待帰
之心必可瘦衰今何肥而麗哉不思我也遂
去毒神

新勅撰

あゝの国語誠なりとのめとむる底信候る京

續古今

後京極攝政

良徳公

たゞ常ぬ国の片々たるぬひるれい月も誠んまゝの山
家隆公

秋より富士のふねえと香を分ても誠る足柄の山

新拾遺

後京極後

時あつたふとわさふ分枝る香も誠ゆきまゝの山

口

上杉兼道

何人の心ともいふ足柄の国や祢やひそか〜ん

堀川百首

以類

足柄の山のふね〜ん来てと不二のふねの程いふ〜ん

家宣

万葉

ゆふきたけ足柄山いふ木切木い切もせり阿〜ん木を

満誓

梅衣志くれ〜ん海客客より程さ〜んあ〜んの山

後三位

顯基

若く程とつ〜んけちのふねれおまのふねむ足柄の山

為家

あ〜んの山の月いふ歌もあくれ神いふ歌を抄候

成実

一神この本賀陽宿のふり商人をわ〜んあ〜れとと
陽宿よりい何〜んい行る魚いふ不いゆ〜んあ〜ん
いけ〜んいあ〜ん仙石系二平いふあ〜れいま乃
いふ物養生雅華殿楊屋の歌いふあ〜ん新葉い

ふかの村よりふりいさぎとけり
ふり

菅根七湯蔡七の巻終

